

「2017 文化で滋賀を元気に！賞」について

表彰概要

■表彰の種類

- (1) 各賞 文化で滋賀を明るく元気にし、活力あふれる地域社会の実現に貢献している団体または個人(若干名)
- (2) 大賞 (1)の受賞候補者のうち最も評価された団体または個人(1名)
- (3) 各賞の名称は、推薦者からの提案に基づき決定

■表彰式 平成30年2月18日(日)15:10～ びわ湖大津プリンスホテル コンベンションホール「淡海」
 ※受賞者には表彰状と記念のトロフィー(陶芸家 川崎千足氏制作)を贈呈。

■募集期間 平成29年8月2日(水)～平成29年11月1日(水)

■候補者 募集期間内に推薦書を文化・経済フォーラム滋賀事務局に提出。自薦、他薦は問わない。

■選考 平成29年12月14日(木) 選考委員会で審査を行い、大賞・各賞を選考。
 選考委員: 中村 順一[元・(公財)淡海文化振興財団理事長]、秋村 洋[(株)プラネットリビング代表取締役]、
 十倉 良一[京都新聞社論説委員]、南 千勢子[ピアニスト]、
 山中 隆[(公財)びわ湖芸術文化財団理事長]、饗場 貴子[元・大津青年会議所理事長]

大賞 創造的保存で未来を拓く文化賞

元・正蔵坊と古庭園を楽しみ守る会(ながらの座・座) / 大津市 (団体名 / 主な活動地域、以下同)



受賞団体について

江戸初期に建てられた登録有形文化財の三井寺の庫裡の一つだった「橋本家住宅[元・正蔵坊(しょうぞうぼう)]」と庭園を、ただ保存するのではなく、新たな文化をはぐくみ楽しむ空間として蘇らせ、地域に開く活動を続けられている。その空間を「ながらの座・座」と名付け、2011年9月に開設して以来、演奏会やトークなどの催しは50回を超える。この「ながらの座・座」の存在と活動を支え、伝えるために設けたのが「元・正蔵坊と古庭園を楽しみ守る会」である。

問合せ 代表 橋本 敏子さん(電話 090-8576-7999)



【講評】

伝統的建物の空間と現代の文化をコラボさせる冒険的な試みであり、参加者の知と感性を刺激する交流の場となっている。ホールとは異なる木と紙、畳の空間、日本庭園につながり池の鯉や鳥のさえずり、時刻や季節の移ろいの中で、演奏者らは新たな創造を模索し、これまでにない境地をめざすことになる。参加者は演奏会後にふるまわれる茶菓をいただきながら、感想を交わすなど余韻を楽しんでいる。代表の橋本敏子さんが現役時代の経験と人脈を生かして企画した活動であり、始めて6年だが中身は極めて充実している。レベルは高く、これからも継続発展させてもらいたい。「ながらの座・座」を訪れる人は、京都・大阪はもとより、名古屋・東京、遠くは札幌からもあるという。地方都市の小さな拠点の活動でも、企画で全国から人を呼び込むことができる、そういう時代が来ていることを本活動は教えてくれる。こうした斬新な試みが、歴史ある門前町で始まったことは滋賀の文化にとって意義があり、大いに評価したい。

(講評執筆 「2017 文化で滋賀を元気に！賞」 選考委員会、以下同)



妖精と暮らす街文化賞

アート探検隊ピカソ・スイッチ 妖精の扉プロジェクト／東近江市

東近江市内の子どもたちとアートを繋ぎ、子どもたちの創造力を豊かに育むまちづくりを推進しようと、2012年から「妖精の扉」を設置するプロジェクトを開始。妖精の世界とつながる「妖精の扉」を市内のあちこちに設置し、子どもたちが独自の物語を作り出すきっかけ作りを行っている。創造力は物事を考え生み出すためにも重要な力だといわれ、生きる力の根源でもある。市内各地の「妖精の扉」を訪ねることで、子どもたちが地域に目を向け知る活動になっていることにも注目したい。設置場所の協力を通して活動は行政機関、企業や個人宅も巻き込む。発想に楽しさ、夢がある。創造が膨らむ魅力あるまちづくりにつなげられたことは、先進事例として評価したい。

問合せ 代表 中祖 厚志さん 電話 0748-24-2355



彦根のにぎわい創出文化賞

アートフェスタ勝負市実行委員会／彦根市

花しょうぶ通り商店街で、作家作品の展示即売などを行う「アートフェスタ勝負市」を開催。商店街、地元大学との協力関係も構築され、滋賀大学園祭実行委、県立大湖風祭実行委、聖泉大学万聖祭実行委、花しょうぶ通り商店街振興組合などが共催する。2016年には商店街を含む「彦根河原町地区」が伝統的建造物群保存地区に指定され、街並みを紹介する“まちあるき”も実施。ごく少数の有志が集まり2000年から始まったこの催しは、2017年で18回の開催となり、町の人々の生活のサイクルに組み込まれるほど無くてはならないものとなっているという。交流の輪が広がり、展示規模も今では100組を超える。20年近く継続し成長を続けるのは容易でなく、にぎわい創出の活動として評価したい。

実行委員長 柴田 いずみさん 問合せ 事務局 電話 0749-22-0325



映像を未来につなぐ文化賞

おうみ映像ラボ／県全域

昭和30～50年代に滋賀県内で撮影された8ミリフィルムを中心に、上映会を開いている。メディアの革新はめざましく、アナログ・フィルムのアーカイブの構築は急務だ。映像に携わる若い世代が8ミリフィルムなど映像の発掘、保存促進、上映に取り組む文化的意義は大きいと言える。また、上映会だけでなく、撮影舞台を歩き、フィルムの製作者や関係者などその地域の人々と参加者が交流する場づくりも行っている。地域の歩み、かつての人々の営みに触れることで、地域を見つめなおす機会にもなる。始めて3年ほどのようだが、活動記録をネットなどで公開し、実績を積んでいる。今日的な取り組みであり、若い世代の可能性を、評価して期待を示したい。

問合せ 代表 長岡 野亜さん 電話 080-9603-5680(専用電話)



地域再発見文化賞

風と土の交響プロジェクトチーム／高島市

滋賀では県外から多くのアーティストたちが移り住んでいる。しかし、制作の場としながらも、作品の展示や発表、販売などは大阪や京都であることがほとんどといわれる。高島市で2011年から開催されている「風と土の交響 in 琵琶湖高島」は、工芸作家や農業者らが工房や自宅を公開し、地域の人々や遠来の参加者と交流している。文化は出会いや対話によって刺激され、旧来の枠組みが揺さぶられることで、新たなものを生み出す。滋賀は古来、京大坂に近く、東国と都を結ぶ街道がいくつも通ることで、多くの文化人が往来した地の利がある。創作活動を応援し、発信しやすい環境をつくることで、滋賀の文化は高まる。高島の試みは期待できる。

代表 澤村 幸一郎さん 問合せ NPO法人結びめ事務局 電話 0740-33-0051



フルートで琵琶湖を奏でる文化賞

フルートオーケストラ湖笛(うみぶえ)の会／県全域

湖笛の会は、滋賀県在住・出身者の女性フルーティストによるフルートだけで構成されたオーケストラ。フルートといっても、ピッコロからコントラバスフルートまで広い音域を奏でることができる。こうしたフルートの奥行きある魅力を届け、滋賀県にフルートオーケストラを定着させる一方、演奏活動は国内のみならず海外公演でも好評を博し、日本のフルート界をリードしてきた。1982年に結成して以来、若手の演奏機会をつくるとともに、クラシックを多くの人に親しんでもらいたいと活動を続けている。2017年7月に開催した35周年の記念演奏会「琵琶湖周航の歌 100周年～琵琶湖からのメッセージ～」では、多くの観客が永年の活動を祝い、県民から高い評価を得ていることをうかがわせた。

問合せ 会長 松山 克子さん 電話 0748-74-0406